

荷物

津守 真

子どもが傍にいる生活は、大人にとって恵まれたことである。

私はこの頃とくに身辺多忙なので、いろいろと煩瑣な思いを持ち込んで保育の場に出てゆくときがある。そんなとき、子どもが傍に寄ってきてくれると、忽ち人間の根底にふれて、それまでとは別の次元で私は動きはじめる。

福音書の中に、「富める青年」に向かつてイエスが、金持が神の国に入ることは何とむつかしいか、らくだが針の穴を通る方がやさしいと言われる箇所がある。金持の青年の心は、手放せないもので一杯になっていたのであろう。そのような心の状態のときには、

「神の国」も心の平安も訪れる余地がないことを言われているのだろう。私は何日もこの同じ箇所を考えていた。

この日、いつも私とゆっくりと過ごすことから一日をはじめると一緒にいたとき、四月から入園したYさんとふと目が合った。Yさんは私を見てにっこり笑った。

Yくんはいつも三輪車の前の荷台に、入りきれないほど沢山のぬいぐるみや電車をいれていて、だれかがそれを一寸でもさわると、大声をあげた。背中にはいつもリュックサックを背負っていて、弁当を半分食べると残りの半分をリュックにいれて帰るまでそうしていた。ことは話さないこの子どもには、好きなものや、やりたいことが一杯あって、それを手放せないでいるように思えた。この日、私を見たYくんの笑顔が心に留まっていた。

ひるころになって、何人かの子どもたちが、新しく作った白木の香りのする戸棚の中に入ったたりして、ぬいぐるみまで持ちこんで、内と外のおそびをたのしんでいた。いつものTくんが戸棚の中でプラスチックのみかんの粒を見つけ、私の口にいったので、私はそれをのみこんだふりをして手の中に握って見せた。その子はすぐに私の掌を開いて、みかんの粒があったと言って、何度もこのおそびをせがんだ。ふと気が付くと、さっきのYくんの足が私の足にからめられている。Yくんはその足を少しずつ動かして私を引っ張ってゆこうとする。私をどこかに連れてゆこうとするらしい。見ると、小さな容器にプラスチックのぶどうやバナナをいれたのを手に持っている。手を引いて連れてゆくなどとい

う大それたことはできないという具合に、Yくんは私の顔は見ないで、足をかからめて引っ張ってゆこうとしたのだった。

Yくんと一緒に二階にゆくと、トースターにプラスチックの容器がいられてあり、Yくんは私にそれを見せた。私の後を追って二階に来たTくんの相手をする私のところに、Yくんは何度も来て笑いかけた。Tくんのプラスチックのみかんの粒と、Yくんのプラスチックの果物の入った容器とが私の頭の中で重なった。Yくんはいつも私がTくんと遊んでいるのを見ていて、同じように私と遊びたいのだと思った。二人の子どもの間にはさまれながら、私は一生懸命にYくんと向かい合った。

この日の午後、三輪車に乗っていたYくんは、リュックサックも背負ってはず、荷台に荷物も積んでいなかった。

Yくんの生活がこれまでどんなだったのか、私は知らない。しかし、背負いきれない程、持ちきれない程の荷物をかかえていることは分かった。わが身にひきくらべて苦笑いをさせられることもあった。他の子が荷物に一寸でもさわると、あたりに響きわたる大声を出すのだから、本人の心は安らかとは言えないだろう。どうしたら軽い気持ちになれるだろうかと、幼稚部の担任たちとしばしば話し合った。

他人の期待に対して敏感で、いろいろの能力をもっているこの子どもに対して、能力があるからと言って常識的な期待をかけることをしないで、この子にとっていま意味のあることができるように、たのしんで一日を過ごせるようにと、私共は願った。

この子どもも、子どもなりに沢山のことをかかえており、それから解放されて、いまを本当に生きることが望んでいるのだろう。どうしたらそうなるのか。簡単に答えは出ない。同じ願いをもって人生を歩む者が、保育の場で共に探究してゆくのであると思う。

人間の根源を生きる子どもと一緒に生活できるのは、ありがたいことである。

(愛育養護学校)

